

たばこの煙でリスク増



科学は、日進月歩という。次々と、新たな発見がある。医学も科学のはしくれた。が、医学的事実が、白から黒と真逆になったのは、医学そのものがインチキくさくなってしまう。

ある講演会でのこと。テーマは、認知症にさせる10か条だ。その第7条は、「タバコを吸わせる」である。で、講演のあと、聞いていた友人に叱られた。「お前、昔は、ニコチンはアルツハイマー病の予防になる。吸う本数が多いほどアルツハイマー病になりにくい」と言っていたはずだ、と。ウーム。よく憶えている。

事実、1991年に発表された

認知症にさせる第7条

論文では、喫煙者はアルツハイマー病のリスクが低いということになっていた。だが、その後、喫煙する認知症患者は早く死亡するところが分かった。間違った結果のものは、統計の取り方が誤っていたからだ。で、現在では、喫煙は、認知症のリスクを上げることが明らかになっている。

さて、タバコがカラダに良くないことは子供でも知っている。が、どれだけ禁煙を勧めても、必要ないほど馬耳東風、のれんに腕押しである。だから、そんなひとが早く死のうが認知症になるうが、それはもう医者責任ではない。

いっぽう、近くでタバコの煙を

受動喫煙させないで

吸わされるほうは、えらい迷惑だ。最近、受動喫煙の量と脳機能低下の関係が分かってきた。他人が吸ったタバコの煙のせいで、吸わされたひとが認知症になりやすくなるというのである。子供も被害者だ。タバコの煙を吸わされていると、その機会が多いほどタイヘン。読解力や算数の成績が悪くなるというデータがある。

お父さん、お母さんにお願いだ。タバコを吸わないひとや子供の前では、絶対にタバコを吸わないでほしい。最近、統計結果が黒から白になることはないようだ。

(石黒修三 しいしぐるクリニック
脳神経外科専門医、金沢市在住)